

今回は、他動詞「あらわす」についてみていく。他への働きかけを表す他動詞においては、その作用が及ぶ対象や範囲に重きが置かれる。「あらわす」という作用が及ぶ対象について、格助詞「を」が付されていて比較的読み取りやすいところからみていくと、4カ所ある。まず、「このよはじめてない事を」（十二号 161）。次に「これを」（十四 12）。「これ」とは前後の文脈から「月日がゆうた」こと（十四 11）と解される。また、「むねのうちを」（十五号 20、21）。そして、「しんの心を」（十五号 65）。

それ以外に、格助詞はないがその対象が解しやすいものを挙げると、「神のりいふく」（一号 25）、「ふしぎ」（三号 104）、「神のどうよふ」（四号 115）、「木のね」（十号 46）、「めゑへの心」（十二号 2、171）、「りやく」（十三号 11）、「神のさねん」（十三号 20）、「せかいの心」（十四号 68）、「をやのざんねん」（十五号 18）、「しんちつの心」（十七号 47）。また、全称的に「どんな事」（十一号 18、十二号 5、171）も「あらわす」と示される。「あらわれる」と同様に、「みな」という語も頻繁に付されており、「あらわす」対象を示したり、それが他の語で明示されている場合には副詞的に用いられたいしている。

また、「あらわす」という他動詞的な用法は、「あらわれる」に「だす」を付けた「あらわれだす」としても登場している。「だす」が付加されるぶん多少ニュアンスは変わるが、意味の上ではほぼ同じであると考えられるので、ここでは「あらわれだす」も併記しておく。「あらわれだす」の対象は、以下の通りである。「どんな神」（六号 11）。「どんな事」（十二号 173）。そして「これを」（十四号 69）の「これ」とは、前の首の「せかいの心」（十四号 68）と解される。

これらをふまえて、その対象が直接的には「みな」によって示されているが、その内容が明示的ではない2つの歌を検討してみたい。「このはなしとこの事やとをもうかな／高いところでみなあらわすで」（十二号 75）。この歌の強調点は、差し当たって「あらわす」という動作・作用の対象ではなく、「あらわす」働きが発動される場、すなわち「高いところで」であると考えられる。それは格助詞「で」でマークされている。そのため、「何を」「あらわす」かはともかくも、ほかでもない「そこで」「あらわす」という意味構造において、「あらわす」が配置されているといえよう。その上で、この「あらわす」の働きを理解するには、十二号全体に目を配らなければならないと考えられる。

十二号では、冒頭で「むねのそふぢ」に取り掛かることが宣言されて、続けて二度「あらわす」が登場する。「このそふぢうちもせかいもへだてない／めゑへの心みなあらわすで」（2）。「このたびは月日しんぢつみかねるで／どのよな事もみなあらわすで」（5）。また、同様の主旨は後半でも述べられて、「めへへの心みのうちどのよふな／事でもしかとみなあらわすで」（171）。「これみたらどんなものでもしんぢつに／むねのそふぢがひとりてけるで」（172）。「このたびはどんな事でもすきやかに／あらわれだしてみなしてみせる（173）」。

こうして、「そふぢ」というテーマにおいて、「あらわす」作用が及ぶ当のものは第一に「心」であり、第二に「心と身の内」に関する全般的な事柄、すなわち「どのよな事」（「どのよ

な事」「どのよな事」「どんな事」）であることが分かる。

さらに、「このそふぢどふゆう事にをもうかな／月日たいないみな入こむで」（74）、「このはなしとこの事やとをもうかな／高いところでみなあらわすで」（75）と、ここでも「そふぢ」がテーマにして歌われている。そして、ここでも「あらわす」の対象は「みな」が担いつつも、全般的な文脈を鑑みるとそれは第一に「心」、また、74の「たいない」という語を受けて、第二に「心と身の内」に関する全般的な事柄であると解される。このように十二号の全体のなかで「あらわす」はほぼ同一の意味合いを帯びていると考えられる。

ところで、この十二号の後半では、上記の171・173の「あらわす」に続けて、自動詞「あらわれ・てくる／でる」が登場する。「あすにちほどふゆうみちをみるやらな／しんの心があらわれ・てくる（177）」。「この心あらわれでたる事ならば／たれもそむきわさらにでけまい」（178）。このように十二号では、「あらわす」という他動詞的な表現と「あらわれ・てくる／あらわれでる」という自動詞的な表現が「むねのそふぢ」という同一テーマで併記されている。

こうした事態は、能動、受動、使役などを説明するときに用いられるいわゆる態やヴォイスと呼ばれる文法範疇で考えると、話し手（書き手）の視点の変化を示していると考えられる。つまり、「おふでさき」の話し手を親神とするなら、その親神がみずからの動作・作用についてみずからの視点から記述するときには他動詞的に述べ、その作用の及ぶ対象の側から記述するときには自動詞を採用する。この箇所であれば、171で「心をあらわす」と述べて、まず、「あらわす」主体の視点から話している。しかしすぐさま次の首の172で「これみたら」とその「あらわす」事態を「みる」主体について言及されており、「あらわす」主体とは別の視点が提示されている。そして、その視点から同様の事態（「あらわす」で示される動作・作用）を描くと「あらわれる」となり、177の「しんの心があらわれ・てくる」と自動詞的に表現されるのであろう。こうして、十二号では「あらわす／あらわれる」を通して、その作用主体の視点からその作用が及ぶ側へと視点が譲られている。

「あらわす」の対象が「みな」によって示されているものの必ずしも明瞭ではないもう一つの歌は、「このはらしどふしてはらす事ならば／つとめぢよよてみなあらわすで」（十五号 85）。まず、格助詞「で」（「て」）があるため、ここでも強調点はその作用対象ではなく、「つとめぢよよ」で「あらわす」という点にある。先行研究においても、この点はそれぞれ明記されている。次に、「はらす」と「あらわす」は文構造的にも語感的にも重なっているように読める。というのも、上の句で「はらし」を「どふして」「はらす」のかと提示した上で、下の句で「つとめぢよよ」「て」と述べられており、「つとめぢよよ」が「どふして」に対応するように見え、さらに ha-ra-su と a-ra-wa-su というように音韻的な一致も見受けられるからである。「はらす」と「あらわす」のこうした緩やかな一致から、「あらわす」の作用対象も、「はらす」の対象である「むねのざんねん」と読み込むことが可能かもしれない。